

【出席者】

常盤、片平、古川、今田、臼井、宇野、大下、久保、古城、松崎、丸山、伊藤、上原

常盤先生の話

テーマ：時間について—量的な時間と質的な時間

2つの時間

企業の経営を考える上で、時間と空間という2つの概念が重要であることは、これまでも何度か指摘してきた。この時間と空間という2つが切り離せない関係にあることは、アインシュタインが相対性理論で指摘した通りである。しかし、今回は時間に焦点を絞って話を進めたい。

企業の経営資源は、ヒト・モノ・カネであると言われているが、これに時間も加える必要があると思う。しかし、ここでいう時間にも2つの側面があるように思われる。それは、量的に測定できる時間と、測定できない質的な時間である。

企業においては、前者の量的な時間が重視されている。時間に追われる、時間を節約する、効率化、合理化、生産性など、仕事と時間に関する言葉はすべて量的な時間を指しており、それを短縮することが、あたかも経営目標のように扱われている。しかしもしそれほど時間の短縮が重要なのであるなら、量的な時間がゼロになったら、その企業は勝者になれるのだろうか。企業は本来の目標・目的を明確にせず、急ぐこと自体を目的化しているのではないだろうか。

時計やカレンダーで測定可能な時間（物理的時間、客観的な時間）それ自体には、意味はない。一方、質的な時間（主観的時間）は、個人や企業が置かれている状況や環境によってその意味を変える。例えば、物理的には同じ時間であっても、ある活動に集中し、楽しく過ごしている時間は非常に短く感じられるし、反対にいらいらしていたり、つまらない活動をしていたりする時には、時間は長く感じられる。また、職業による時間感覚の違いもある。デイトレーダーのような職業では1分1秒が非常に重要な意味を持つが、農家では、1日2日の違いはそれほど大きくはない。このように、質的な時間には重さ（軽さ）や濃さ（薄さ）といった意味があるのである。

『モモ』における時間

ミヒヤエル・エンデの『モモ』について、大島氏（訳者の大島かおり？）が書いた話が時間の意味を考える参考になる。

「計る時間には意味はない。時間とは生きることである。人の命は心を住みかにしている。時間とはその様に捉えるべきである。」

「大人は子供たちによって時間の大切さに気づく。大人の時間の過ごし方、それは心の生活であり、豊かな生活である。急げ急げと仕事をするのではなく、愛情を込めた仕事をするべきである。」

効率化や時間の節約ばかり気にしている人は、静かに落ち着いた時に時間を持てあましてしまう。それは時間の本当の意味が分かっていないからである。つまり、普段から急いでばかりいる人は、心や暮らしがやせていくのである。

企業においても同じことが言える。急げ急げでは良い仕事はできない。深く考え、夢と仕事が重ね合わさるような、質的に充実した時間を過ごすべきである。時間の質は「幸福」が一つの基準になると思う。

時間の解釈

時間の解釈については、古くは4～5世紀の神学者・哲学者であるアウグスティヌスの『告白』に書かれている

「私自身は時間とは何かを知っているが、それを説明しようとするとなんか分からなくなる」

これが時間の本質ではないか。重要であることは誰もが分かっているが、捉え所のないもの。「知」や「真」、「愛」といった言葉と同じである。

また、時間に関する解釈は東洋と西洋とでは違っているように思える。西洋では、過去から現在、未来へと直線上を進んでいるイメージであるのに対し、東洋では円のような循環をイメージする。直線とか循環と言っても様々なタイプがある。始めと終わりがある直線、始めはあるが終わりが無いもの、両方ないものがあり、これらは文化や宗教の違いと関係している。循環も同様で、一周回って元に戻る循環や、らせん的に進歩する循環である。

こうした時間の解釈は抽象的な話になりがちであるが、仕事や経営と密接に結びついている。例えば、仕事に対する報酬は量的な時間に対して払われるが、質的にどのような時間を過ごしていたのかについては問われない。そもそも質と量は次元が異なるので、同時に語る事が困難である。

時間は変化

仕事と時間の関係を考えると、仕事をこなす時間、仕事を考える時間、仕事に流される

時間の3つがあるように思う。それぞれの時間について質を高めていくことが、まさに経営そのものなのである。なぜなら、経営とは時間の中で起きる変化との戦いであり、その戦い方を考えることが経営である。組織としての時間の処し方から、経営というものをもう一度考えてみる必要があるだろう。例えば、会議のあり方についてシャープやイトーヨーカドーの取り組みが参考になると思う。また、残業の費用対効果を考えることも、時間という切り口から考えた経営であろう。

仕事に目標があるのか。同じ時間であっても目標がなければ時間の無駄遣いに、目標があれば有意義に時間を過ごすことができる。これは個人にとっても集団にとっても同じことである。効率性を追い求め、時間に追われる日々から抜け出し、じっくりと目標を定めることが重要なのである。時間に追われて近道を探せばかりいと、その途中で本質を置き忘れ、置き忘れたことに気づかず行動してしまう。一度立ち止まって、なぜ、どうして、という問いを自分に投げかけ、状況を観察し、洞察することが創造力を発揮させ、質の高い仕事へと結びつくのである。「時を制するものはビジネスを制する」といっても過言ではない。

コメント

- ・ 組織によって時間感覚が異なる。例えば老舗の時間感覚は非常に長く、代が替わったとしても時間感覚が受け継がれる。時間感覚を継承する仕組みがあるのではないか。
- ・ 地方の衰退は、効率化の面で都市部に負けてしまったからである。その為に、ヒト・モノ・カネのすべてが都市部に移動してしまった。効率的かどうかという競争ではなく、質的な競争になれば地方も復活するのではないか。
- ・ 時間＝変化＝アクションである。例えばサッポロビールの黄色いカバーは小さなアクションに過ぎないが、それが周りの人に思いを伝えるきっかけとなる。目標に対してアクションを起こすことが重要である。
 - ポーター賞に東海バネが選ばれた。ポーター賞が成長したのだろう。
- ・ 葉室頼昭『神道 見えないものの力』春秋社。日本人の労働観が書かれている。
 - 幸せや生き甲斐、やりがいも「儲かった」の中に含まれるのではないか。
 - 創業200年以上の家族経営。エノキアン協会。
 - 「稲村の火」の話。浜口梧陵。

【発表】

松崎：スタジオジブリの経営。短期間にブランド力を高めた経営に注目。

宮崎駿を中心とした狩猟民族型の経営。自然に対する畏敬。